

信越地方の国分寺瓦

梶 原 義 実

はじめに

筆者はこれまで、各国の国分寺出土瓦について集成的に分析を加え、国分寺造瓦組織の全国的な様相について総合化する試みを続けてきている。

本稿では地理的にも関係の深い信越および佐渡地域を題材とし、国分寺出土瓦およびそこから復原される造瓦組織の編成・展開のあり方について、私見を述べていきたい。

1. 信濃

沿革

信濃国分寺・国分尼寺は上田市国分に位置している。昭和38年から46年にかけて発掘調査がおこなわれ、僧寺においては回廊が講堂に取り付き、塔を回廊外の南東に配する伽藍配置が、尼寺においても伽藍の全貌が確認されている。さらに平成12年以降、上田市教育委員会において継続的に調査がおこなわれている。

信濃国府としては近年、国分二寺の北方台地状に所在する上田市国分遺跡群において、掘立柱建物や大溝の遺構および、瓦の出土が確認されており、信濃国府と推定されている（倉澤 2005・2008など）。

国府および国分二寺の出土瓦その他についての見解としては、倉澤正幸氏により相次いで提示される諸論が詳細で卓越しており（倉澤 1994・2008・2014・2016など）、また近年の山崎信二氏の論は、信濃国分寺の造営年代観に大きな影響を与えた（山崎 2006）。本稿でも基本的にはそれらの研究に従い、筆者の見解も織り交ぜつつ述べていく。

信濃国府の瓦

国分遺跡群からは、管見の限りでは軒丸瓦3型式、軒平瓦2型式の出土が報告されている。花卉端部が桜花状を呈する素弁九弁蓮華文軒丸瓦、滴状の花弁を2本の凸線で表す単弁十弁（もしくは九弁）蓮華文軒丸瓦、子葉を直線状に表し弁間に珠点をもつ単弁九弁蓮華文軒丸瓦、左行する巻きの強い唐草を表現する偏行唐草文軒平瓦、直線的で枝状に退化した支葉をもつ偏行唐草文軒平瓦であり、軒丸瓦は瓦当部に接合溝を彫り丸瓦を差し込む印籠付けの技法であ

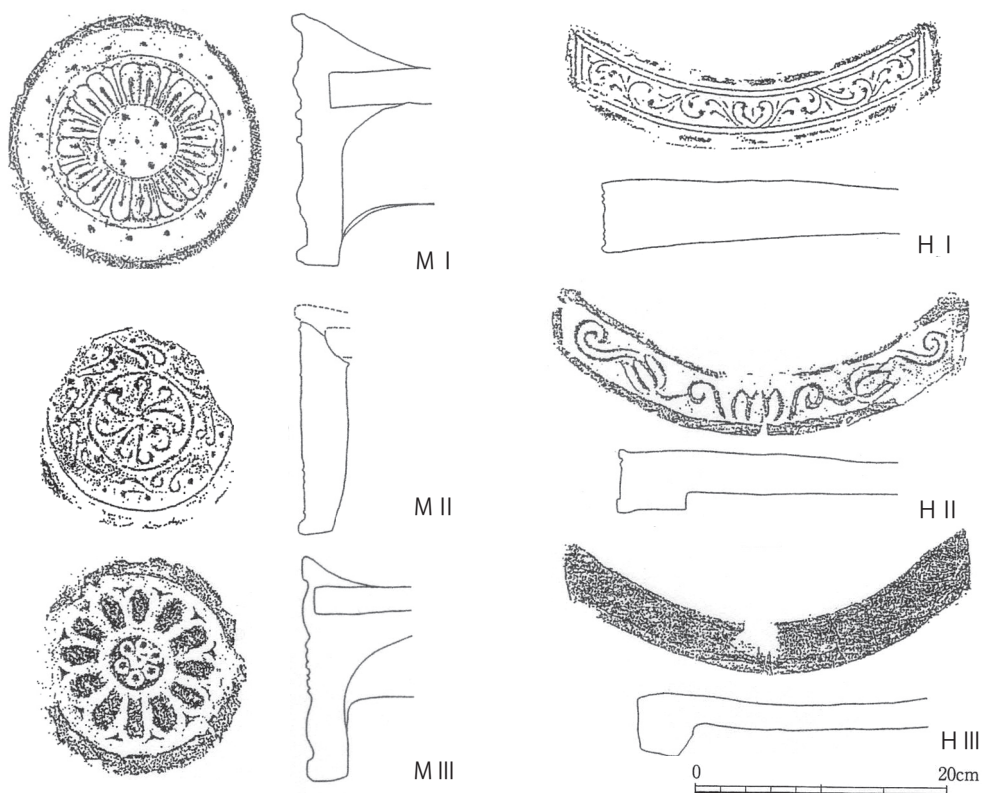


図1 信濃国分寺出土瓦

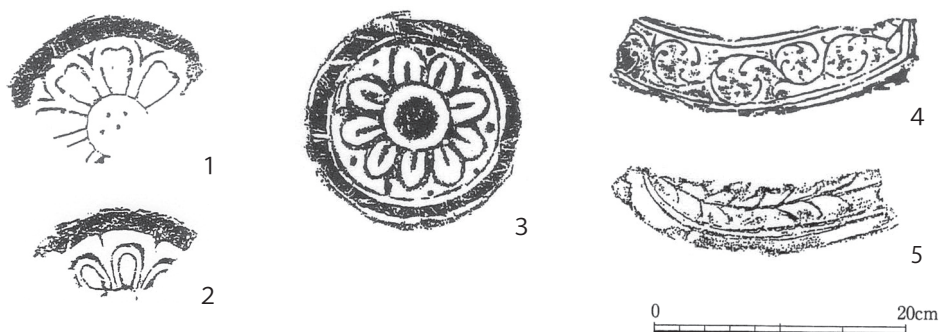


図2 国分遺跡群周辺出土瓦

り、左行する偏行唐草文軒平瓦は、実測図をみる限りでは、直線顎に近い曲線顎Ⅱで、包み込み技法の個体が存在するようである。生産地としては、上田市依田古窯跡群に近接する諏訪田遺跡から、左行する偏行唐草文軒平瓦が出土している。

信濃国分寺・国分尼寺の瓦

信濃国分寺・国分尼寺出土瓦の98%を占める主要瓦は、いわゆる東大寺式（平城6235型式）軒丸瓦と、平城6734型式の軒平瓦のセットである。とくに軒平瓦については近年、6734型式C種との同范が確認されており、平城京からの瓦范の移動が想定されている（山崎 2006）。軒丸瓦は印籠付け（倉澤 1994）、軒平瓦は直線顎の一枚作りである。国分寺に近接する国分寺瓦窯で生産された瓦とされる（倉澤 2014など）。

その他の組み合わせとして、蕨手文軒丸瓦と均整蓮華文軒平瓦のセットが確認されている。蕨手文軒丸瓦は内区に8本の蕨手を4本ごとに対にして配し、外区には2本1対の唐草文を9単位巡らせている。横置型一本作りで製作されており、瓦当部と丸瓦部をそれぞれ別粘土を貼り付けて作るため（丸瓦部貼り付け技法）、通常の接合式とほぼ同様に、丸瓦部が剥離する個体がみられる。瓦当裏面には丸瓦部から続く布目が上半に観察され、下半の布目はケズリ調整で消されている。均整蓮華文軒平瓦は中央に3枚の花弁の側視蓮華文を配し、その左右に外行する唐草と側視蓮華文を組み合わせた文様を施している。貼付段顎・桶巻作りで製作されている。

その他、素弁十二弁蓮華文軒丸瓦や三重圈文軒丸瓦、素弁四弁蓮華文軒丸瓦、素文軒平瓦などが出土したとされるが（倉澤 2014）、いずれも数量的にはわずかであり、素弁十二弁蓮華文軒丸瓦以外の瓦は筆者自身では実見できていない。

信濃国府・国分二寺出土瓦の年代

まずは国分二寺主要瓦の平城6235-6734系瓦について述べる。先述のとおり、軒平瓦は平城6734 Cと同范であることが確認されており、この瓦は平城京内では西隆寺南側の平城京右京二条二坊十六坪の井戸から、西隆寺所用瓦とともに出土していることから、山崎信二氏は造西隆寺司から信濃国分寺への瓦工の派遣を想定し、西隆寺の造営開始年代や製作技術から、信濃国分寺の軒平瓦の上限を神護景雲3（769）年と考えた（山崎 2006）。

ところが近年、6734 Cについて西隆寺周辺以外の京内、左京二条七坊十五坪や唐招提寺でも出土例が確認されており、それを踏まえたうえで原田憲二郎氏は、6734 Cが西隆寺所用瓦であるとする山崎氏の論に疑義を呈している（原田 2016）。原田氏はさらにその年代観について、同型式の6734 Aの文様構成から、平城第Ⅱ-2期～第Ⅲ-2期（749～757年）におさまると考え、信濃国分寺への瓦范の移動についても、750年代後半まで遡る可能性を指摘している。原田氏の論は説得的で傾聴すべきではあるが、この瓦が西隆寺所用瓦であるかはともかく、右京二条二坊十六坪の井戸から、多くの西隆寺所用瓦（6761 Aなど）と共伴している事実は重要

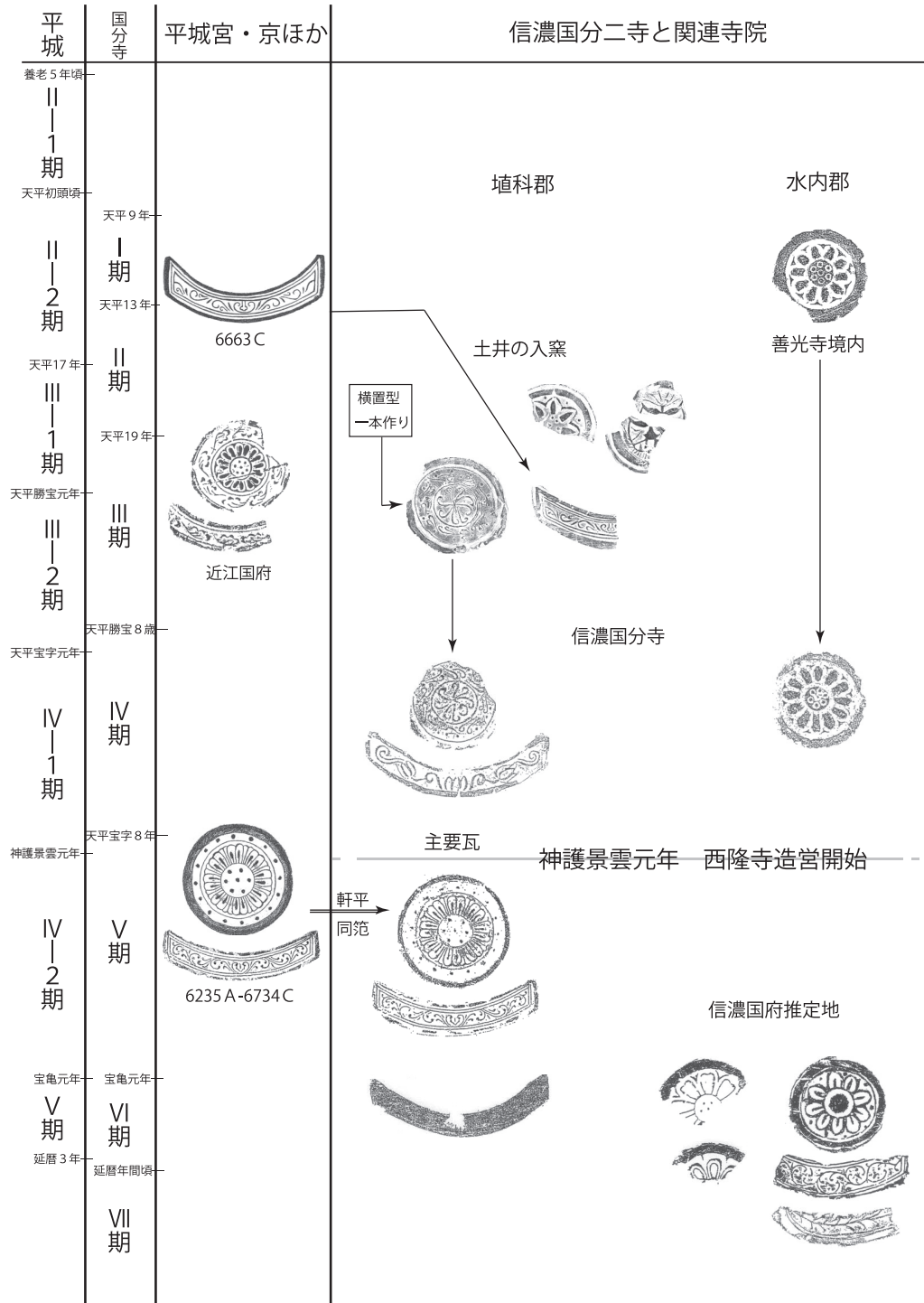


図3 信濃国分寺等瓦編年図

であろう。今後さらなる検討が必要とも考えられるが、本稿ではとりあえず山崎氏の年代観に従っておき、年代の確定は今後の調査研究に委ねたいと思う。いずれにせよこの瓦は、平城宮ではなく京内からの出土品であり、京内諸寺を含めた京系工人の手によるものであることは疑いない。

またそれ以外の瓦類については、従来は平安時代前期の補修瓦とされており、とくに蕨手文軒丸瓦や均整蓮華文軒平瓦については、出土状況が尼寺東門地区や僧寺北方など伽藍周辺域から出土することから、筆者は先行研究の成果なども鑑みつつ、主要瓦に続く8世紀第3四半期後半から第4四半期という年代を与えた(梶原 2010)。しかし近年、倉澤氏および鳥羽英継氏により、創建瓦よりやや古い「初期瓦」であり、尼寺中門付近にこれらの瓦を用いた「先行建物」が存在した可能性が指摘されている((倉澤 2014)(鳥羽 2014)(倉澤・鳥羽 2014))。これは筆者も心惹かれる見解である。蕨手文軒丸瓦については同文瓦が坂城町土井の入窯(埴科郡)で出土しており、近傍の込山廃寺に供給されている。土井の入窯ではこの瓦のほかに、単弁蓮華文軒丸瓦や鬼面文軒丸瓦を生産するが、いずれも横置型一本作りで、細部調整においても蕨手文軒丸瓦と同様の特徴をもつ。軒平瓦としては、平城6663型式の軒平瓦が出土している。土井の入窯と信濃国分寺の蕨手文軒丸瓦の文様を比較すると、信濃国分寺のほうの線が太く太く大ぶり、また土井の入窯の個体に僅かにみられた蕊状の表現が国分寺では失われることなどから、土井の入窯出土瓦が信濃国分寺出土瓦に先行すると考えられる。土井の入窯出土瓦の年代としては、平城6663型式軒平瓦の存在や、蕨手文軒丸瓦の文様意匠が近江国府や下野国分寺の創建瓦などにみられる飛雲文軒丸瓦と、文様のにも製作技法的にも共通点があることなどから、8世紀第3四半期頃が上限とみてよく、国分寺の蕨手文軒丸瓦はそれにやや後出するのとらえてよいであろう。素弁十二弁軒丸瓦についても、長野市善光寺境内(水内郡)において文様意匠の酷似した素弁十弁蓮華文軒丸瓦が出土していることから、蕨手文軒丸瓦や均整蓮華文軒平瓦と同様に「初期瓦」であるとされている(倉澤 2014)。

国府遺跡群出土の瓦群については、倉澤氏の論考の中で、花谷浩氏による指摘として、奈良時代末期から平安時代前期という年代が与えられており(倉澤 2005)、筆者も実見したが、とくにそれに異を唱える見解をもたなかった。

信濃国府・国分二寺の造瓦組織

信濃国分寺の主要瓦は、先述のとおり西隆寺との関連が指摘されており、道鏡政権下における造寺事業の一環として、造西隆寺司に属する瓦工の一部を派遣して造瓦がおこなわれたとされる(山崎 2006)。これらの瓦は、国分寺に近接した国分寺瓦窯で生産されたといわれている。

しかしそれ以前にも信濃国分寺では、埴科郡土井ノ入瓦窯で生産された蕨手文軒丸瓦・均整蓮華文軒平瓦の系譜を引く瓦や、水内郡善光寺境内と同範の瓦などが確認されており、国分寺の本格的造営より以前に、在地寺院系の瓦をもちいた仮設堂宇の造営がおこなわれたようであ

る（倉澤 2014）。

なお、国分寺の主要瓦については、国内にまったく波及せず、それからわずかに遅れて造営される信濃国府においても、国分寺系の瓦は採用されず、むしろ在地色の強い瓦がもちいられており、生産地も依田古窯跡群に移っている。信濃における国分寺をはじめとした官営施設の造瓦における中央の影響は、きわめて限定的であったといえよう。

2. 越後

沿革

越後国分寺については、その位置は残念ながらあきらかになっていない。唯一その候補と目されるのが、上越市に所在する本長者原廃寺である（坂井 1983 など）。ここからは寺院の塔基壇とも考えられる、14m×14mの掘り込み地業と版築を伴う基壇痕跡などが検出されており、また廃寺の北西に近接する今池・下新町遺跡からは、数は多くないものの、ここから持ち込まれたと考えられる平瓦・丸瓦の出土がみられる。この瓦については、上越市向橋瓦窯で焼成されたものとされる（坂井 1987 など）。

出土瓦

これらの諸遺跡から出土する瓦は、わずかの平瓦と丸瓦のみで、軒瓦は現在のところ確認されておらず、瓦のみから年代を判定する根拠に乏しい。

坂井秀弥氏によると、丸瓦はいずれも無段式で、凸面の縄叩きを残すものと消すものがあり、平瓦は縦位縄叩きの一枚作りとのことであった（坂井 1987 など）。

筆者も今池・下新町遺跡出土瓦について確認したが、平瓦の一部の個体において、側面調整が桶の円弧の中心方向を向く個体が一定数存在し、また縦方向に粘土の重ね目らしき跡と、その周辺にユビナデやユビオサエで調整した痕跡が確認できた。この点については報告書でも触れられており、「第一次成形は粘土板巻きつけによると思われる。桶状模骨痕は認められない。……撫による指頭圧痕の残るものがある。」「側面は凹面に対し、直角に近い角度で篋削り」（山本肇 1984）と述べられているが、執筆者の山本肇氏は、判別は難しいとしながらも、一枚作りとの結論を出している。

また丸瓦についても、「凹面糸切り痕の存在から、第一次成形は粘土板巻き付け技法によるものと考えられる」（山本肇 1984）とされるが、一部の個体では、顕著な糸切り痕が残らず、むしろ横方向に均等に粘土の剥離痕が確認される個体も存在し、粘土紐作りの個体も存在した可能性も考えられよう。

いずれにせよこれらの諸遺跡からの瓦出土は少数で、その多くが小片資料でもあることから、製作技法については今後の調査研究の進展を待ちたい。

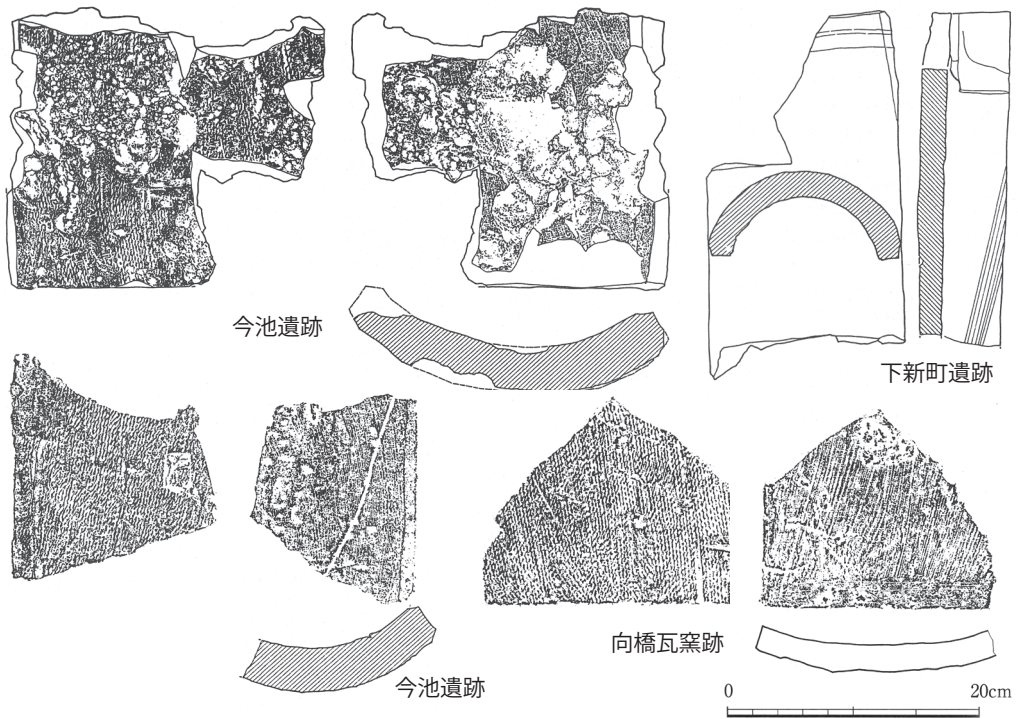


図4 越後国分寺関連遺跡出土瓦

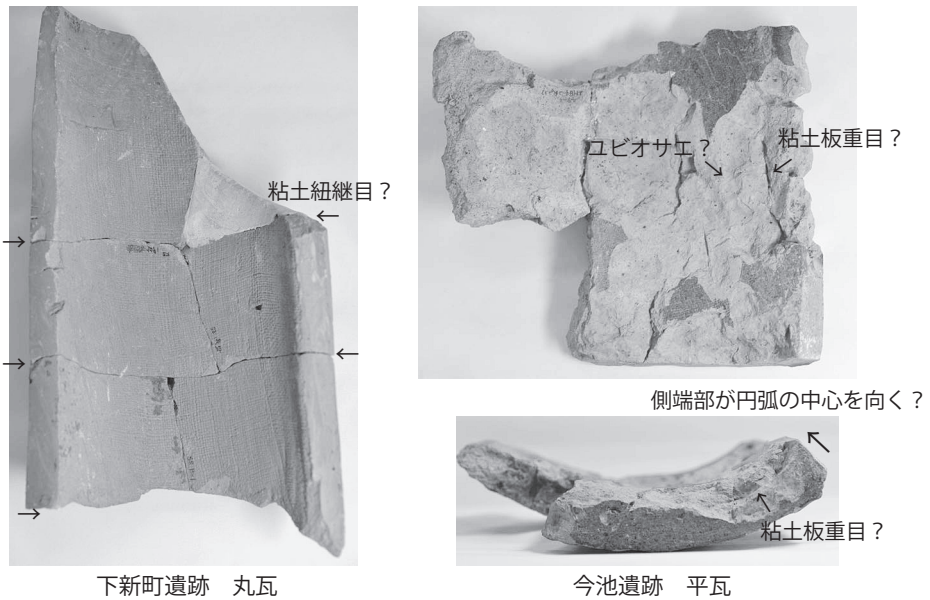


図5 越後国分寺関連遺跡出土瓦 製作技法に関する写真

年代については、向橋瓦窯出土須恵器の年代から、8世紀中葉～後半頃とされる（坂井 1987）。筆者もこれ以上に年代を絞り込める根拠をもたない。

3. 佐渡

沿革

佐渡国分寺は新潟県佐渡市国分寺字経ヶ峰に所在する。昭和の初年頃から調査がおこなわれており、回廊が金堂に取り付き、塔を回廊の東側に配する、いわゆる国分寺式の伽藍配置が確認されている。昭和28年には斎藤忠氏らによる礎石の実測調査がおこなわれ、平成11年以降、伽藍縁辺部を中心に、佐渡市教育委員会による継続的な調査がおこなわれ、報告書も刊行されている（（若林 2004・2005）（川村 2008））。尼寺の位置はあきらかになっていない。

佐渡国分寺の瓦

佐渡国分寺の瓦については、文様はやや粗雑であるものの、他の国分寺に比しても極端に多い数の範が確認されている。これらの瓦は、寺院に近接する瓦専業窯である経ヶ峰窯および、寺院の南西方約11kmにあたる瓦陶兼業窯である小泊窯での生産が確認されており、経ヶ峰窯より小泊窯のほうがより新しい様相を示すとされる（山本 1987など）。

近年、川村尚氏によって、膨大な型式数の国分寺出土瓦について、経ヶ峰・小泊両窯出土瓦との文様の・製作技法的比較をもとに、佐渡国分寺瓦の詳細な編年案が提示されている（川村 2008）。筆者も川村氏の編年はおおむね妥当と考えており、分類番号も氏の付した表示を踏襲するが、本稿では各瓦当文様ごとに系列化をおこない、各期の瓦当文様の様相をあきらかにするとともに、若干の私見を述べたい。

それに際して、これらの瓦については、古く『国分寺の研究』の段階ですでに、今井滋二氏・源豊宗氏によって、軒丸瓦は菊花文・剣頭文・柳葉文に分類され、さらにそれぞれ浮文のものと沈文のものがあることが指摘されている（今井・源 1938）。本稿でもこの瓦当文様による分類はある程度有効であるとし、参考にしつつ系列化をおこなうことにする。

軒丸瓦 1・2 は陽刻の単弁菊花文である。菊花文とされたとおり、中房は極端に小さく、花弁は細長い。弁間には細長い楔状の間弁を配する。1 は六弁、2 は七弁である。経ヶ峰窯から出土しており、形式的にも佐渡国分寺では最古の瓦として位置づけられている（川村 2008 など）。筆者もその見解に異論はない。出土割合は合わせて 8 % 程度である。

3・4・5・8・14 は陰刻の菊花文系瓦である。文様のにもっとも崩れの少ない、八弁の 3A・3B は、合わせて約 25 % と佐渡国分寺でもっとも多く出土しており（川村 2008）、約 12 % の割合を占める 4A・4B とともに、創建期の主要瓦と考えられる。陰刻菊花文系瓦はその後、5A・5B のように七弁化・六弁化していき、8 や 14 ではさらに文様退化が進む。3 お

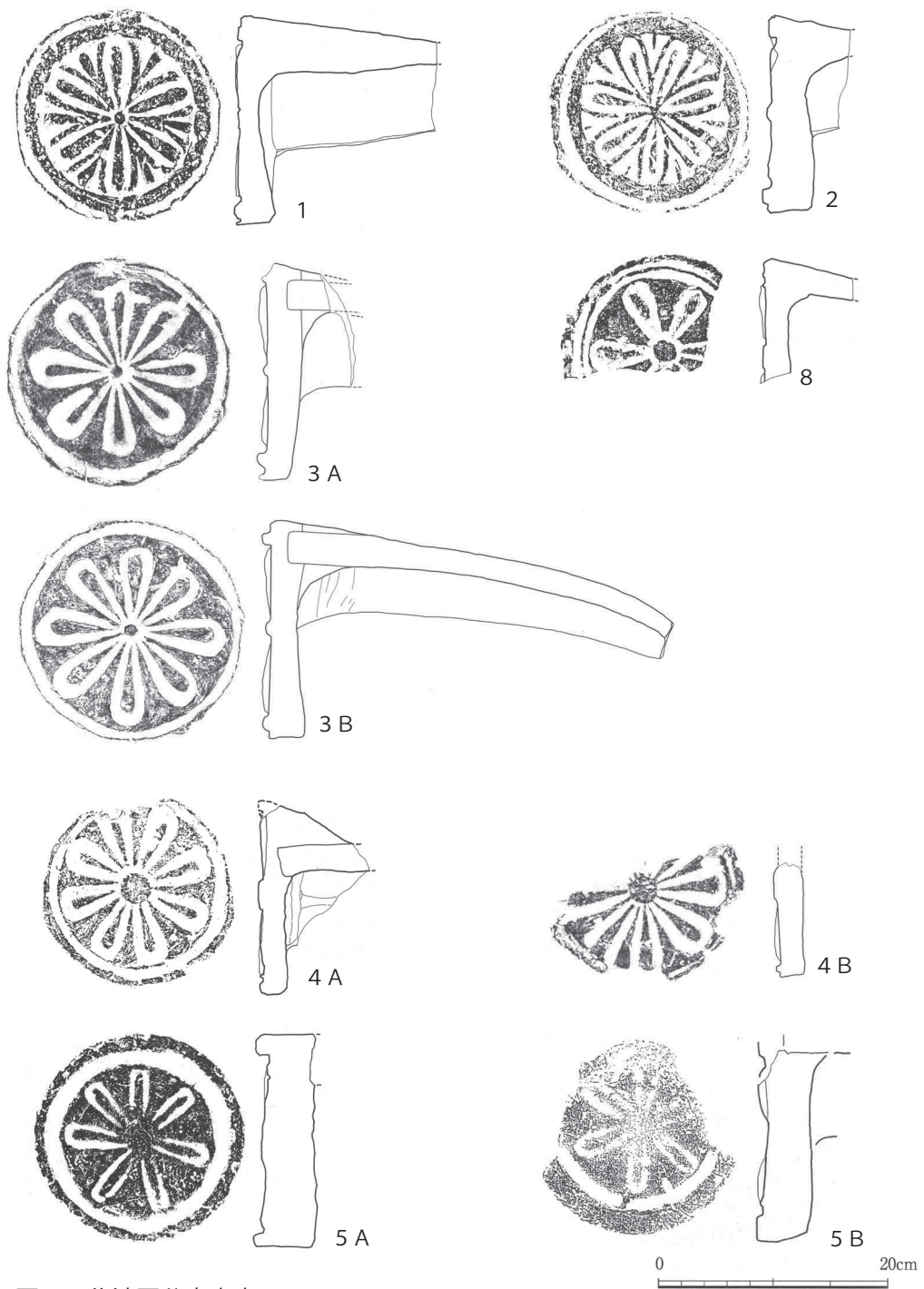


図6 佐渡国分寺出土瓦(1)

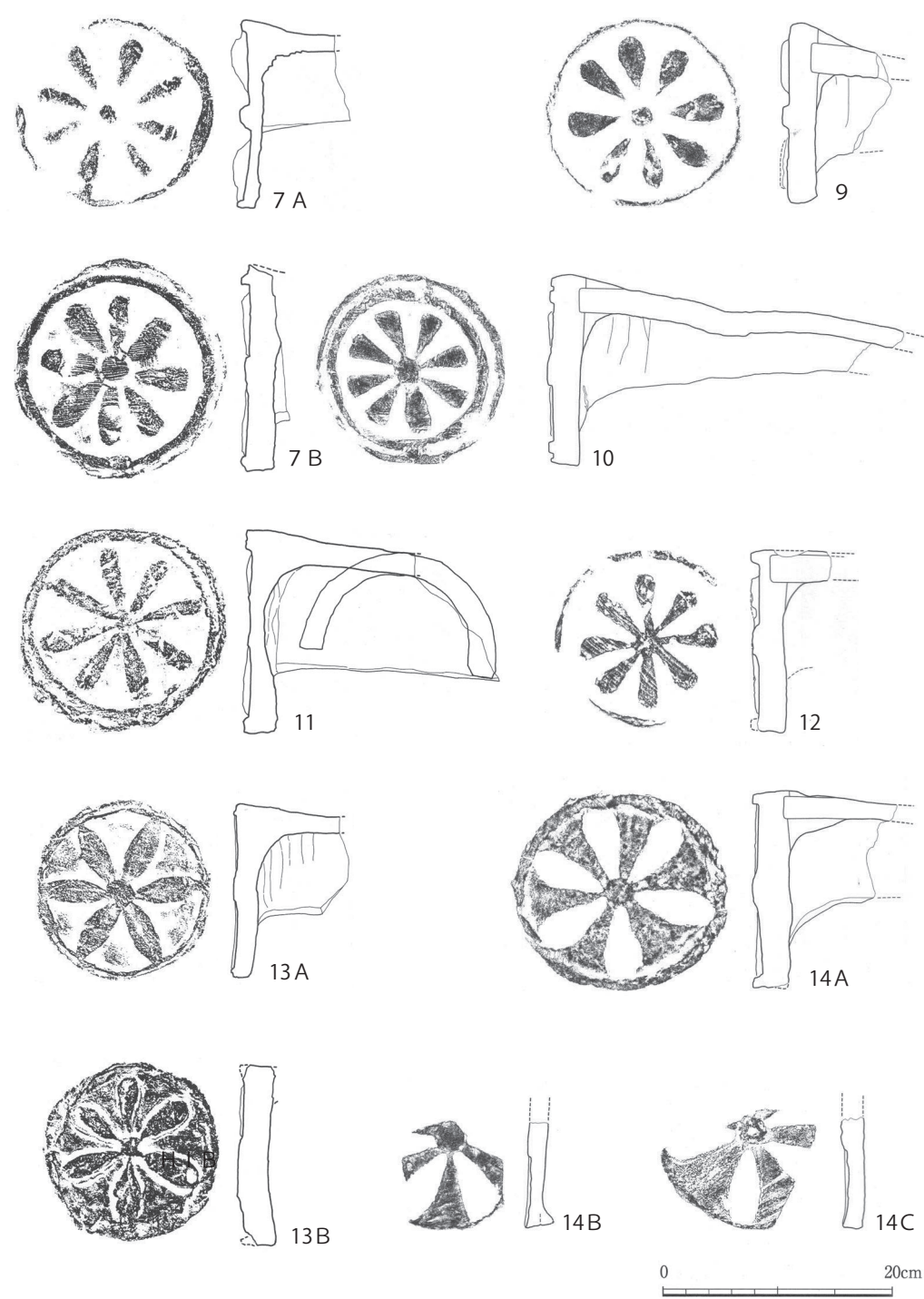


図7 佐渡国分寺出土瓦(2)

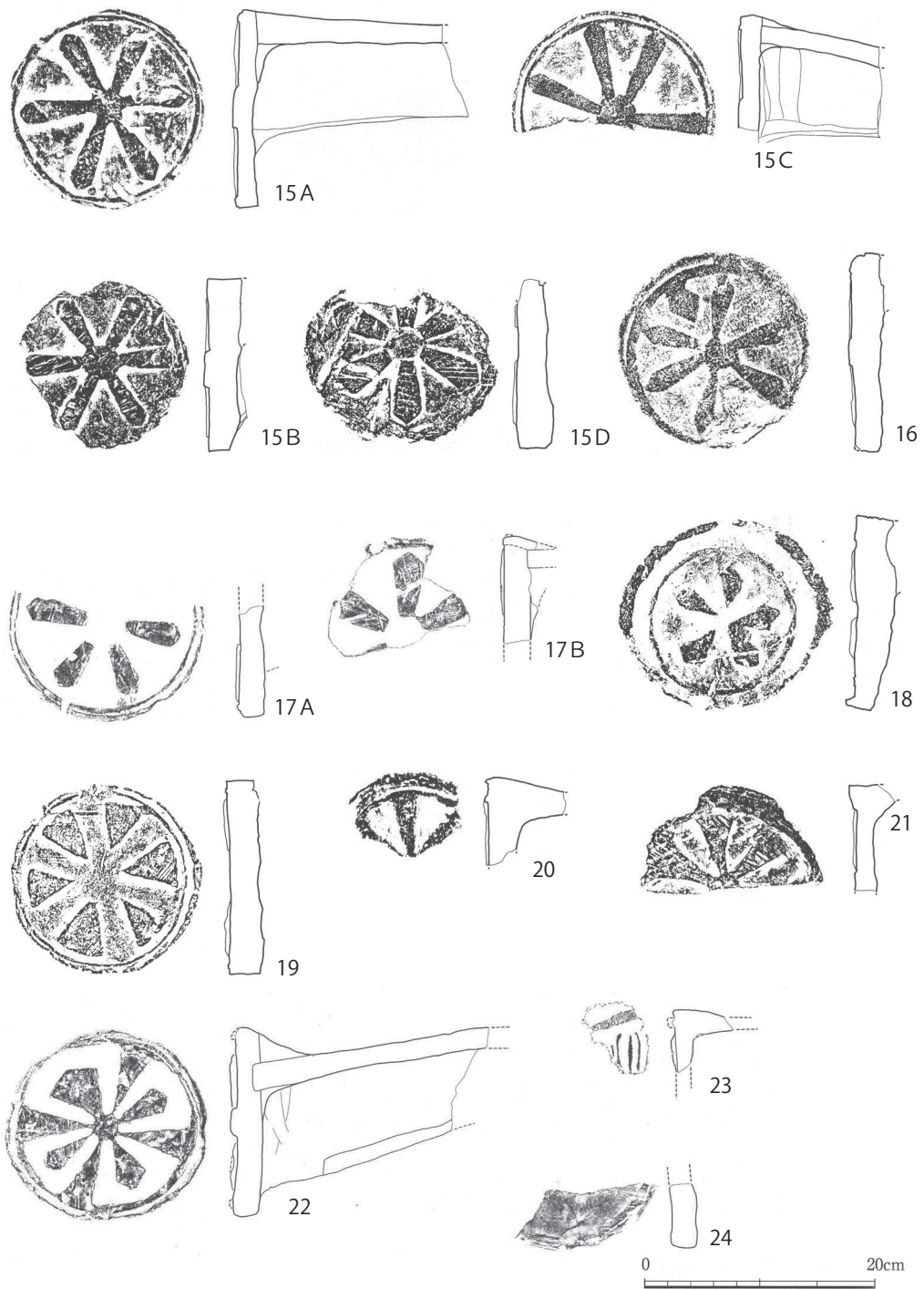


図8 佐渡国分寺出土瓦(3)

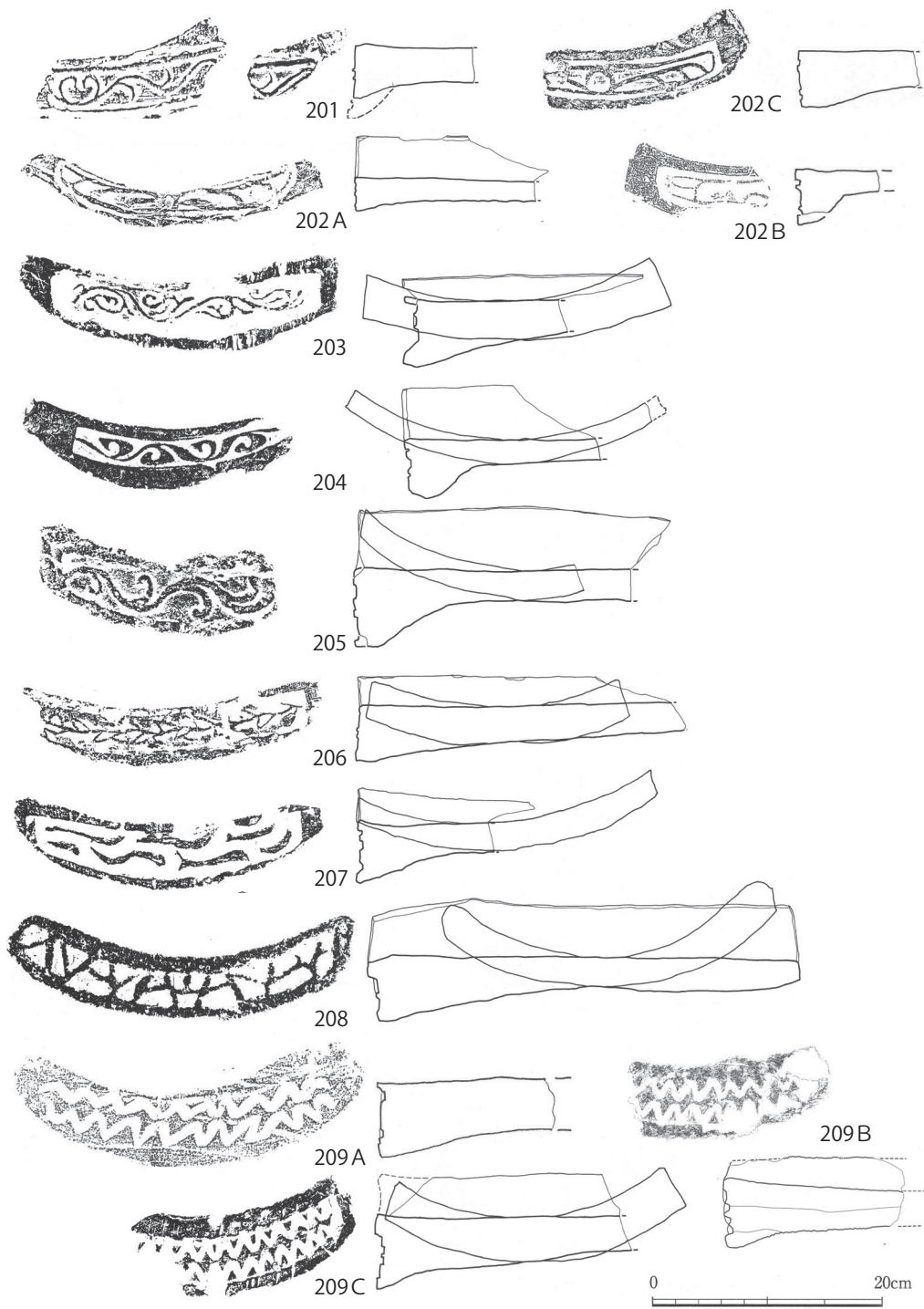


図9 佐渡国分寺出土瓦(4)

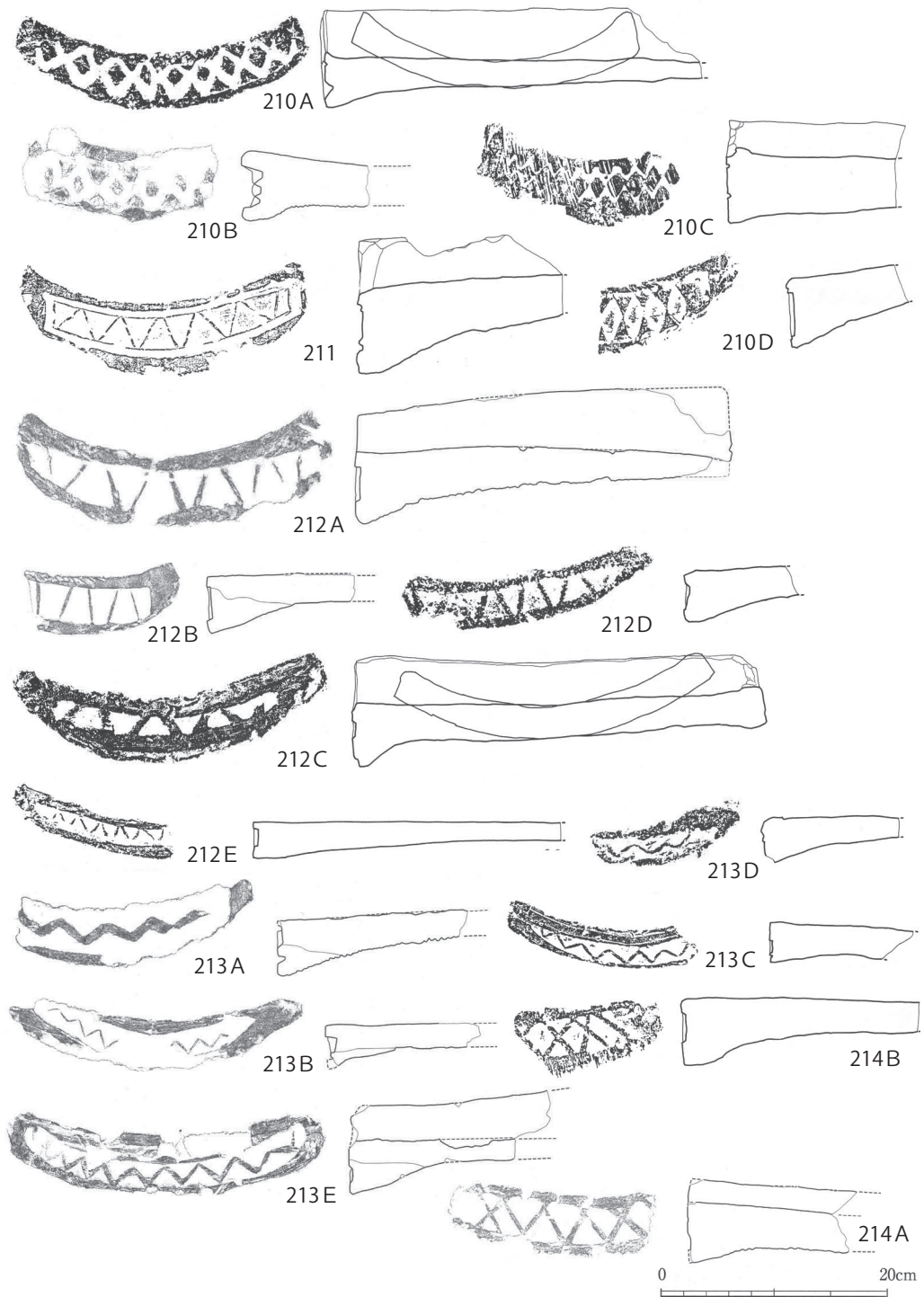


図10 佐渡国分寺出土瓦(5)

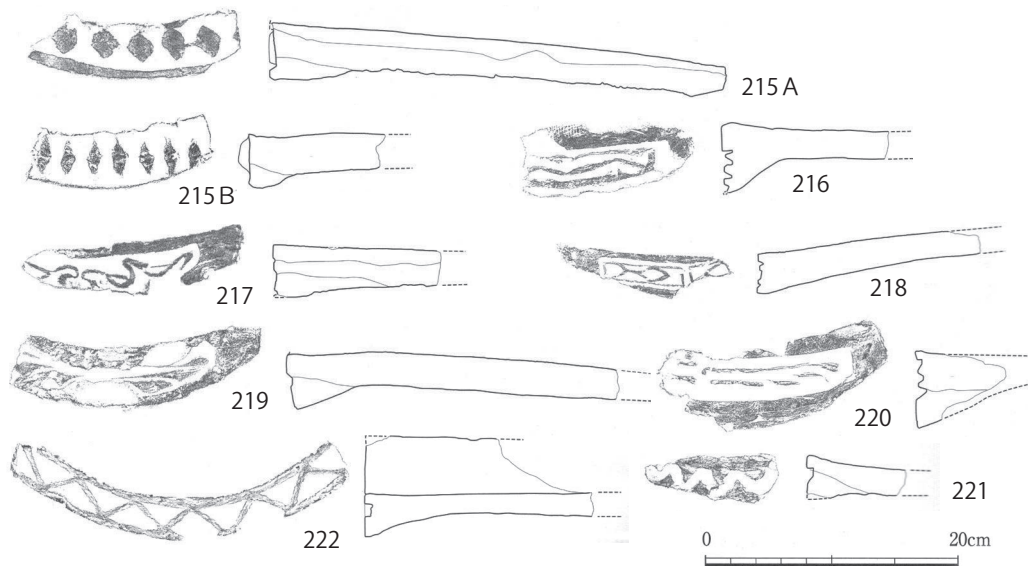


図11 佐渡国分寺出土瓦(6)

よび5A・5Bが経ヶ峰窯で出土しており、4Aも技法的にその可能性が高いとされるなど、その多くが経ヶ峰窯産とされる一方で、もっとも型式退化が進行した8や子葉表現が失われた14については小泊窯産とされる。陰刻菊花文については、七弁で子葉をあらわさない瓦が、出羽の小松原窯で出土している。

7・9・11・12は陽刻の菊花文系瓦である。文様構成的には経ヶ峰窯産とされる9がもっとも崩れがすくなく、7A・7Bと文様がやや崩れ、小泊窯産の11や10・12では、花卉と中房が接して表現される。またこの陽刻系の系譜は、15・16・17・18など、花卉が六弁化し先端が剣頭化した一群や、さらに13など柳葉文系、19・20の楔形文系などへと文様変化していく。剣頭文系では経ヶ峰窯産とされる17が古く、花卉と中房が接する15の段階で小泊窯へと生産地を移す。柳葉文系の13A・13Bも小泊窯での出土が確認されている。陽刻の菊花文については、十弁のものが出羽城輪柵やその供給窯である泉森窯で出土しているが、中房や外区などおなじ出羽の小松原窯の文様との共通性が高い。

軒平瓦201・202は均整唐草文である。201はもっとも文様の崩れがすくなく、区画線によって囲まれた内区には、中心飾りから外行する3単位の唐草が一条となって展開する。202では中心飾りが円形になり、唐草も直線的になるなど、かなりの文様退化がみられる。201および202Bは経ヶ峰窯産とされ、202Aは小泊窯での出土が確認されている。おなじく小泊窯産とされる220・217や、218・219も、均整唐草文の崩れたものであろう。小泊窯産の段階になると、瓦当面が薄くなり、また瓦当面および平瓦部断面が三日月状に近くなる。三日月状瓦当については、遠江(梶原 2010)や上野の一部の瓦などで確認されている。また軒平瓦の側端面

などに、凹面から回り込む布目痕が残る瓦も多く、筆者はかつて、立ち上がりのある成形台を使用した結果で、型作りの一種であると論じた(梶原 2010)。これも遠江国分寺などで類例がみられる。直接の関係性については不明であるが、三日月状瓦当とともに、瓦陶兼業窯で比較的顕著な特徴であると判断する。201は5.1%、202は3型式あわせて約6.3%と、一定数が出土している。

203・204・205・206・207は偏行唐草文である。経ヶ峰窯産の203は右行する流麗な4単位の唐草文で、唐草には支葉が配される。205はおなじく右行の唐草だが、支葉表現に省略がみられる。小泊窯産の204は文様が形式化しており、また三日月状瓦当に近い形状を呈する。206は唐草が硬化し葉状に近い表現になっている。陸奥安積郡家とされる清水台遺跡(福島県郡山市)に瓦を供給した原田窯で、類似した表現の瓦が確認されているが、過去にも触れたとおり(梶原 2010)製作技法的にはやや乖離しており、後述の幾何学的な鋸歯文系の影響をうけた文様退化とみたい。207やまた217も偏行唐草文の退化形態と思われる。208は偏行または均整唐草文が、鋸歯文系瓦の影響をうけ退化したものであろう。203が5.1%、206が6.8%と比較的多数出土している。

209・210・215・221は陰刻の鋸歯文系瓦である。経ヶ峰窯産の209は、陰刻の鋸歯文を上下に2本配する。偏行唐草文の退化形態との見解もある(川村 2008)。おなじく経ヶ峰窯産の210では、上下の鋸歯文が融合し、菱形文化している。経ヶ峰窯産とされる215 A・Bでは鋸歯表現から陽刻の菱形文へと文様が逆転してしまっている。215 Cは瓦当が三日月状に近くなる。209がA～Cの3型式で5.1%、210がA～Cの3型式で14.8%と、多く出土している。

211・212・213・214・222は陽刻の鋸歯文系瓦である。211型式は鋸歯文の周囲に界線を巡らせるもの、212型式は界線が失われ鋸歯門のみとなるもの、213型式は鋸歯文が外縁につかないもの、214は鋸歯文の一部がX状に交差するものである。文様的に先行するのは211型式と考えられ、また経ヶ峰窯産とされる212 A・213 Aがそれに続く。212・213とも、後続する212 B・212 C・212 D・212 E・213 B・213 C・213 D・213 Eはいずれも小泊窯産とされ、212 Aから比較的文様の崩れもすくない222も同様に小泊窯産とされる。陽刻鋸歯文の系譜はその早い段階で小泊窯へ移動したのと考えられる。212が5型式で12.5%、213も5型式で9%、214が2型式で4.5%と、陰刻鋸歯文系と同様、かなりの出土量がある。なお212については、208の唐草文の省略形態との見解もある(川村 2008)。

佐渡国分寺瓦の年代と造瓦組織

以上、佐渡国分寺の出土瓦について、その系統関係ごとにまとめてきたが、これをもとに佐渡国分寺瓦の年代と系譜について、若干の私見を加える。

まず佐渡国分寺における最先行の軒丸瓦については、単弁六弁蓮華文の1であることは衆目の一致するところである。これまでその系譜について触れられることがすくなかったが、おな

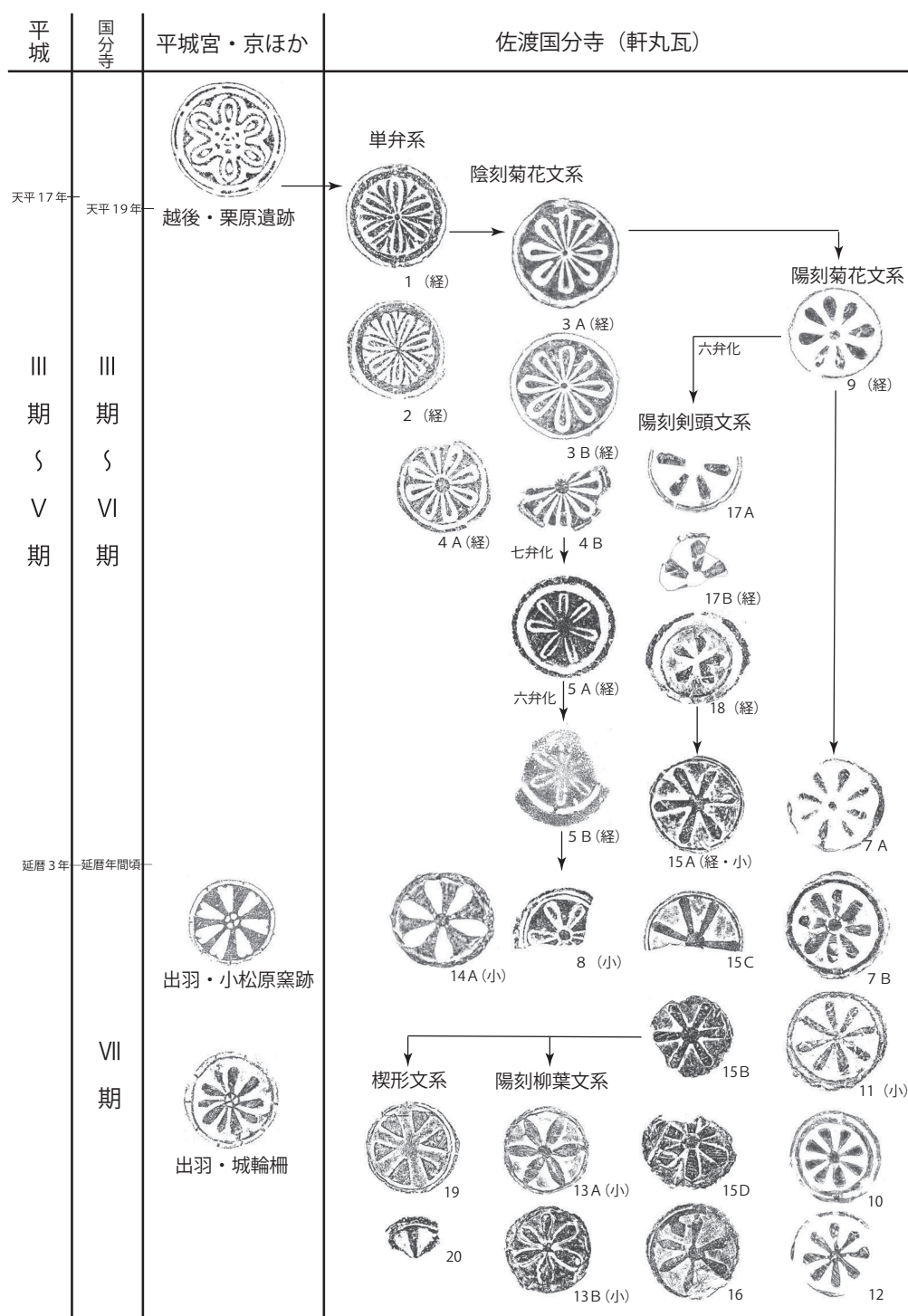
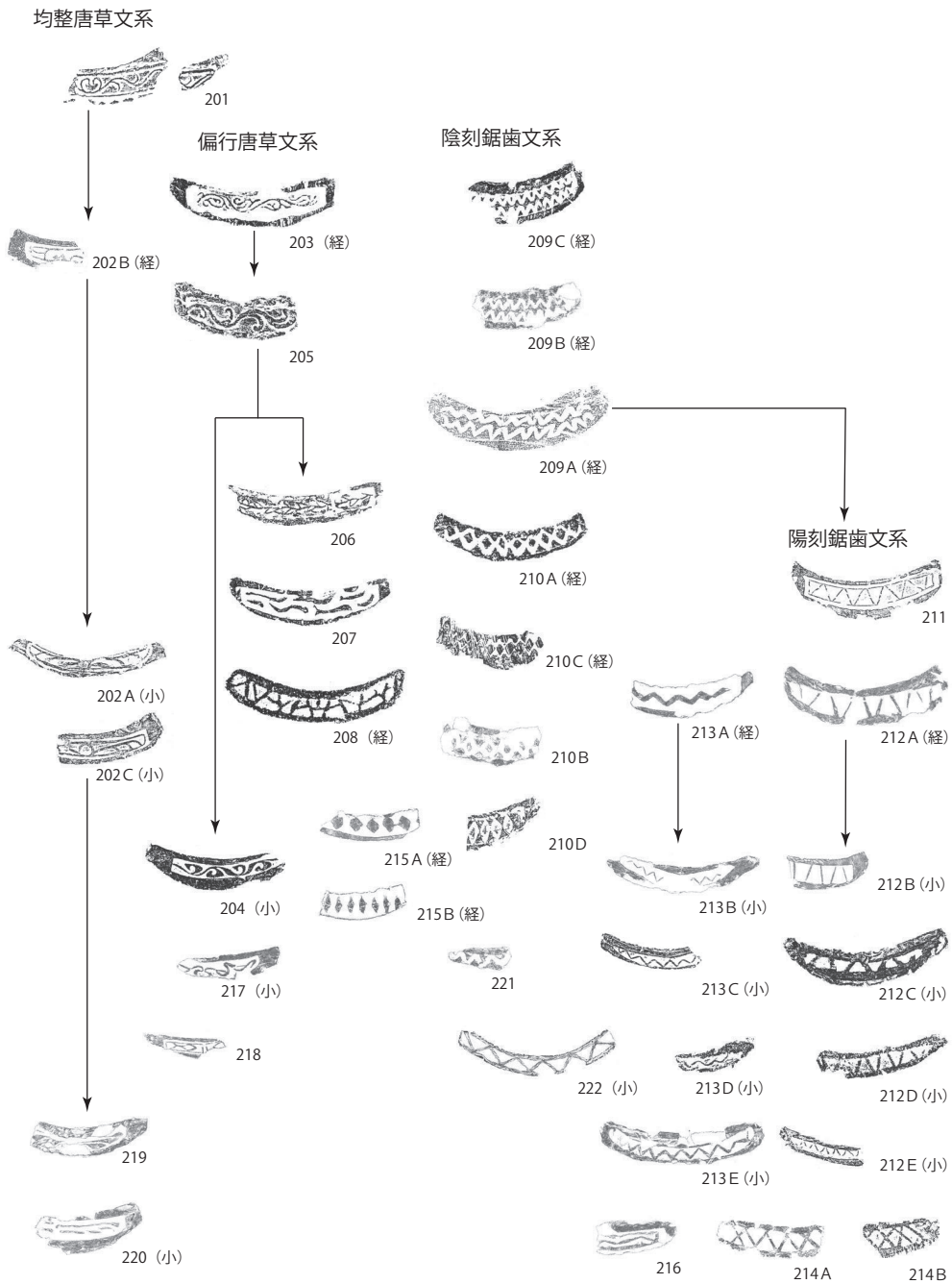


図12 佐渡国分寺瓦編年図

佐渡国分寺 (軒平瓦)



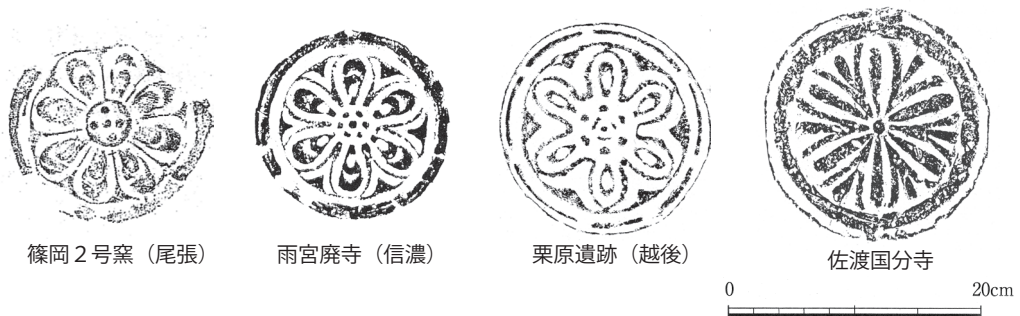


図13 佐渡国分寺軒丸瓦の祖型

じく六弁であることや、花卉および子葉の表現形態、外縁を突出する一条の太い圈線で表現することなど、越後頸城郡家ともされる栗原遺跡の瓦との類似点が多い。

栗原遺跡の軒丸瓦については、信濃雨宮廃寺の瓦からの影響関係がかねてより指摘されるが(坂井 1987など)、さらにその祖型は、上原真人氏が図示するとおり(上原 1997、88-89頁)、尾張篠岡2号窯で出土した、大和奥山廃寺同範瓦に求められると考えられる。篠岡2号窯の瓦は八弁ではあるものの、花卉および子葉の表現形態や、瓦当裏面を回転ナデ調整で仕上げる点など、雨宮廃寺や栗原遺跡との共通点が大きい。信濃や越後、また佐渡には、東海系の須恵器の影響が強くみられることは多くの研究者が指摘しており((坂井 1988)(川村 2013)など)、このような須恵器に由来する技術系譜をもつ瓦の移動とよく整合する。

その年代であるが、篠岡2号窯の操業年代が7世紀第3四半期におかれること、栗原遺跡ではこの軒丸瓦とともに、桶巻作りの平瓦が出土することなどを勘案すると、すくなくとも8世紀の前葉頃には越後までおよんでいたと考えられる。佐渡国分寺の軒丸瓦1についても、9世紀前半と時期を下げてとらえられることが多いが((春日 2002)(川村 2008)など)、8世紀後半頃まで遡らせても大過ないのではと考える。ただし佐渡国分寺の段階ではすでに、桶巻作り平瓦は伴わず、すべて一枚作りとなっていることや、軒丸瓦の製作技法が栗原遺跡はベタ付けに近いのに対し、佐渡国分寺の軒丸瓦1・2など経ヶ峰窯産の瓦は、接合溝を彫って丸瓦を差し込むなど、栗原遺跡の瓦との製作技法的な乖離はみられる。

一方で春日氏は出羽小松原窯出土の陰刻軒丸瓦を佐渡国分寺に先行するものと述べるが(春日 2002)、七弁であることを考え合わせても、いずれも9世紀前半とされるこの瓦や城輪柵出土瓦は、佐渡国分寺の軒丸瓦と関連があると仮定しても、それよりむしろ後出のものであろう。

経ヶ峰窯から小泊窯へと生産地が移動した時期については、小泊窯出土須恵器の年代観から、9世紀後半～10世紀頃ということで、多くの同意をみており(川村 2008など)、筆者も異論はない。経ヶ峰窯産瓦と小泊窯産瓦については、経ヶ峰の軒丸瓦が瓦当に接合溝を彫るのに対し、小泊窯のものはベタ付けである(川村 2013)など、製作技法上の微差はあるものの、文様系譜やおおまかな技術系譜は共通しており、経ヶ峰窯から小泊窯へ工人が移動したものと

考えてよかろう。瓦專業窯での生産よりむしろ、東日本の日本海岸一円に流通圏をもつ当時の大規模窯業生産地である小泊窯で瓦生産もおこなったほうが、生産効率的により有利だったのであろう。

軒瓦の対応関係は難しい。陰刻菊花文軒丸瓦およびおなじく陰刻の鋸歯文軒平瓦は、いずれもほとんどが経ヶ峰窯産であり、逆に陽刻菊花文軒丸瓦と陽刻鋸歯文軒平瓦は、その初現こそ経ヶ峰窯であるが、ほとんどの型式が小泊窯で生産されている。陰刻どうし、陽刻どうしがそれぞれほぼ対応するとみてよかろう。最先行の単弁系軒丸瓦は、均整唐草文軒平瓦や偏行唐草文軒平瓦のうち、先行する201や203などに対応するのであろうか。

おわりに

以上、信濃・越後・佐渡の3国の国分寺瓦についての考察を述べてきた。

3国とも国分寺造営以前には、古代寺院の造営が比較的低調であった地域であり、そういった中で、国分寺造営詔に従い、七重の塔を含めた国分寺の新造をおこなっていくのは、並大抵のことではなかったと考えられる。それゆえの造営の遅れもあったことが推察されるものの、中央大寺系の工人からの技術援助や、在地須恵器生産との融合など、国ごとにあらゆる手段を講じて国分寺をなんとか建ちあげていった様子がみてとれよう。

本稿を著すにあたっては、資料調査等、下記の諸機関等にお世話になりました。末筆ながら心より御礼申し上げます。

上田市立信濃国分寺資料館・佐渡市教育委員会・新潟県埋蔵文化財センター

主要参考文献

- 伊藤邦弘・渡辺淳一 2006 『小松原窯跡・長者屋敷遺跡・坂ノ上遺跡』山形県埋蔵文化財センター
 今井法二・源豊宗 1938 「佐渡国分寺」『国分寺の研究』下巻 考古学研究会
 上田市教育委員会 1974 『信濃国分寺一本編一』
 上原真人 1997 『瓦を読む』講談社
 梶原義実 2010 『国分寺瓦の研究—考古学からみた律令期手工業生産の地方的展開—』名古屋大学出版会
 春日真実 2002 「佐渡の古代土器」『まほろばの時代』両津市郷土博物館
 春日真実 2006 「佐渡の玉作り・古墳・窯業」『日本海域歴史大系』2 清文堂
 堅木宜弘 2002 「佐渡国分寺跡～最近の調査～」『まほろばの時代』両津市郷土博物館
 川村 尚 2005 『小泊窯跡群Ⅰ』佐渡市教育委員会
 川村 尚 2008 『佐渡国分寺跡発掘調査報告Ⅲ 伽藍周辺の調査』佐渡市教育委員会
 川村 尚 2013 「遺跡から見た古代の佐渡」『越後国域確定1300年記念事業記録集』新潟県教育委員会
 倉澤正幸 1994 「信濃国分寺出土瓦の再検討—瓦当範と製作技法—」『中部高地の考古学』Ⅳ 長野県考古学会
 倉澤正幸 2005 「上田地方の信濃国府跡推定地について」『千曲』126 東信史学会

- 倉澤正幸 2008 「古代信濃における軒瓦の一考察—信濃国分寺跡他出土軒瓦の様相—」『長野県考古学会誌』126
- 倉澤正幸 2014 「遺構・遺物から考察した信濃の古代寺院跡」『法政考古学』40
- 倉澤正幸 2016 「信濃地域の東大寺式軒瓦」『8世紀の瓦づくりⅤ—東大寺式軒瓦の展開—』奈良国立文化財研究所
- 倉澤正幸・鳥羽英継 2014 「改作された国分寺—信濃国分寺跡の近年の研究成果から—」『季刊考古学』129 雄山閣
- 小島幸雄 1984 『新潟県上越市本長者原廃寺確認調査概要』上越市教育委員会
- 斎藤孝正 1990 「尾張における飛鳥時代須恵器生産の様相」『名古屋大学文学部研究論集』107 (史学36)
- 坂井秀弥ほか 1979～1984 『栗原遺跡発掘調査概報』1～6 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1983 「新潟県上越市本長者原廃寺の再検討—越後国分寺推定地の一例—」『新潟史学』16
- 坂井秀弥 1987 「栗原遺跡」「向橋瓦窯跡」「本長者原廃寺」『北陸の古代寺院—その源流と古瓦—』桂書房
- 坂井秀弥 1988 「越後、佐渡における古代土器の生産と流通—8～10世紀を中心として—」『北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 高松俊雄 1994 「郡山市開成山窯出土の瓦—清水台遺跡出土瓦の変遷に関して—」『郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 研究紀要』1
- 高松俊雄 2000 「安積・安達郡」『第26回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
- 戸根與八郎 1997 「佐渡」『新修国分寺の研究 第7巻 補遺』吉川弘文館
- 鳥羽英継 2014 「信濃国分寺造営初期段階の様相—「補修用瓦」(初期瓦)の分析を通して—」『長野県考古学会誌』149
- 野尻 侃 2004 『泉森窯跡 坂ノ下遺跡』山形県埋蔵文化財センター
- 原田憲二郎 2016 「国分寺造営期における中央と国分寺の同範瓦」『日本古代考古学論集』同成社
- 水戸部秀樹 2003 「城輪柵出土の軒丸瓦」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』1
- 森 郁夫 1986 「古代信濃の畿内系軒瓦—国分寺造営期を中心として—」『信濃』38-9 信濃史学会
- 山崎信二 1994 「平城宮・京と同範の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察」1993年度文部省科学研究費一般研究C
- 山崎信二 2006 「平城京内出土軒瓦と信濃国分寺出土軒瓦」『古代信濃と東山道諸国の国分寺』上田市立信濃国分寺資料館
- 山本 仁 1995 『佐渡国分寺』真野町教育委員会
- 山本 仁ほか 1995 『経ヶ峰窯跡』真野町教育委員会
- 山本 肇 1984 「第三章今池遺跡 3節A4 瓦」「第四章下新町遺跡 3章C 瓦」『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 山本 肇 1987 「佐渡国分寺跡」「小泊窯跡群」『北陸の古代寺院—その源流と古瓦—』桂書房
- 米山一政 1982 「雨宮廃寺跡」『長野県史 考古資料編 1-2 主要遺跡(北・東信)』長野県
- 若林篤男 2004 『佐渡国分寺跡Ⅰ』佐渡市教育委員会
- 若林篤男 2005 『佐渡国分寺跡Ⅱ』佐渡市教育委員会

図版出典

- 図1～3：信濃国分寺(上田市教育委員会 1974)、国分遺跡群(倉澤 2014)、平城宮・京(奈良国立文化財研究所 1996)。
- 図4：(山本肇 1984)
- 図5：新潟県教育委員会蔵。筆者撮影。
- 図6～13：佐渡国分寺(山本肇 1987)(川村 2008)、栗原遺跡(坂井 1987)、小松原窯(伊藤・渡辺 2006)、泉森窯(野尻 2004)、篠岡2号窯(斎藤 1990)、雨宮廃寺(米山 1982)。

キーワード：国分寺、瓦、信濃、越後、佐渡

Abstract

The Roof-tiles of Shinano, Echigo, and Sado Provincial Temples

Yoshimitsu Kajiware

In this paper, I carry out research as part of an integrated study on the roof-tile organization of old Japanese provincial temples. In it, I focus on the three provinces of Shinano, Echigo, and Sado, which have a deep geographical relationship, and discuss the formation and development of roof-tile organization.

With respect to the Shinano provincial temple, although the construction of its buildings took place around the year 770, which is considerably later than in other provinces, I argue that perhaps prior to that time, temporary structures were built that used the same variety of temple roof-tiles as found in the local area.

Regarding the tiles of the Echigo provincial temple, because there are not many related materials, I only introduced the specific characteristics of its roof-tile manufacturing technique.

As for the roof-tiles of the Sado provincial temple, I organized their many types by lineage, and presented the possibility that the founding roof-tiles may have originally come along with the Sue pottery makers from Owari via Shinano and Echigo. I also pointed out the possibility that its founding period dates back to the late eighth century.

Keywords: Provincial Temples, Roof-tile, Shinano, Echigo, Sado